

Title	経済学に於ける経験の方法に就て (De l'expérimentation en science économique positive)
Sub Title	
Author	フランソワ, シミアン 松本, 信広
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1930
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.24, No.12 (1930. 12) ,p.1967(95)- 1982(110)
JaLC DOI	10.14991/001.19301201-0095
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19301201-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の蓄積(希冀圖) 111—112頁参照

註四八

Das Kapital, Bd. III. 1. Teil. SS. 225-226. 資本論第三卷(上) 二〇八頁

註四九

Mary, Theorien über Mehrwert. II. 2. Teil. S. 263.

(一九三〇—一一—二七)

經濟學に於ける經驗の方法に就て

(De l'expérimentation en science économique positive)

フランソア・シミアン
松本信廣譯

(本稿は昭和五年十月三日シミアン教授が本塾に於て行ひたる講演の草稿を邦譯したものである。)

予は、此大學府慶應義塾に於て講演をなす御招待を受けたことを甚だ光榮に思ふ。予は此大學の過去及び現在における業績、正當なる名聲、絶えざる進歩を既に知悉してをる。予は、此處に「經濟學に於ける經驗方法に就て」なる未發表の研究の要點を諸君の前に述べる御許しを願ふ。そして經濟學方法論及び經濟學の研究に極めて興味を有し、かつ極めて造詣深きことを予のかねて知悉せる聽講者の面前に、此論述を初めて試することは予の甚だ欣快とするところである。

來年度あらはるべき著書(註一)中に予は既に成立せる實證科學の中に使用せられる方法を經濟事實の部門中に適用せんことを提議した。

今日その科學の最も進歩せる領域中に於ける如く經濟の範圍に於ても實證科學 science positive を樹立せんと求むるには、その目的としてたゞに事實を観察し、記述するのみならず、とりわけそれの説明 explanation を求めねばならぬ。即ち現實を説明する(或ひは少くとも説明に資する)普遍形

式の諸關係 des relations de forme universelle (形式論理學に云ふ意味において) を樹立することができねばならぬ。

此企圖の實現に使用せられる近代科學に本質的な且つその特色である方法 Procédé (又は方法全體 l'ensemble de procédés) は、實驗 expérimentation である。最も効果多く、最も確實と確認された研究 recherche と證明 preuve 二つを兼ねた様式たる實驗である。疑ひもなく當初に研究すべき對象を決定し、それより引き出すべき觀念 notion を決定することを含み、次に出立點或ひはその途上、然し何れにしても肝要な方式で可能的關係にある諸事實に對し合致せる確認 constatations conjoints をなすことを含んで居る。然しかゝる諸準備かゝる諸要素の決定的行使は吾人が經驗 expériences と名づくるものの中に果される。そしてこのことが實證科學中の研究と證明とに極めて必要なるものの如く思はれ、従つてそれならば知識の或部門に實證 positive の形容言はとにかく少くとも實證科學 science positive といふ稱呼を當然否むべきである。

しかして事實吾人の研究範圍に於ては、學者は實驗室に於て勞作し得ず、その好む所に従ひ事實を生み得ざるもの(よしなし得ても結果を制限し、無効にしがちの諸條件中に於てしか行ひえぬ)とすれば、吾人はなほそれでも經驗を行ふことが出来やうか、その方法や如何。此疑問の返答が重要なことは明瞭である。然し研究にさきだち、問題それ自身を明確にする必要がある。

吾人が例へばあらゆる準備的諸條件を満足させる賃銀についての觀察を有するとせよ。即ち是等の觀察から全ての資料がその起因から確實な材料によつて抽出され、その繼受 transmission 組合

せ combinaison、仕上げ élaboration のあらゆる階梯において一切の保證を提示する人物により方法により取扱はれたとし、更にかゝる觀察が正當に定義された現象に對してなされ、必要充分と認定されし諸特質をよく提示し、肯定的意味にも否定的意味にも共に明々白々の方式で、關心すべき全部の事情について知識を與ふるし、満足すべき様式に従ひ、成立した總體的表現、——もしありとせば——を提示するとせよ。それでも吾人は、かゝる觀察をもつて吾人の企圖に應ずる經驗をつくり、しかも出来るだけよく之をつくらなければならぬ。すなはちかゝる觀察を吾人に利用し、吾人の研究對象の説明的關係 relations explicatives をまづ第一に吾人の智識に一番大切な少くとも最も手のつけやすきものから充分確實強力な根據と共に提示せしめるため是等の諸觀察を出来るだけよく利用するやう心がけねばならぬ。事實吾人が現在の場合全ての諸條件を充分満足する觀察を有してゐないといふ事實は、この問題を提起する所のものではない。しかも、この問題は何れにしても存在するものであり、一層強硬に提起され、既に存する困難に新しき困難をつけ加へ、これを複雑化するばかりである。此方法論的問題は、吾人の企てに對し、明かに本質的決定的な重要性を有し、それ故二重に吾人の注意に値するものである。

しかしこれに手をつけるに先立ち、經驗とは何ぞやといふことをよく定義して經濟學における實證的立法を辯護するため又は反對するため行はれる一切の論争を惱ますところの屢、起る誤解を防ぐのが利益であるやうに思はれる。世人は屢、實驗と觀察とを反對なものとする。そして後者は、自然に生起する事實を觀察者が干渉せずその儘に確認する作用であり、之に反し實驗は、實驗者の

活潑な干渉により、設置され、利用せられた何等かの装置、機械等により、要素 elements 又は事情 circumstances の何等かの物質的設備により一事實を提示する作用であるといふ。これは全く皮相的な定義であり、附隨的なもの、又は習慣方法にすぎざるものを本質として採用し、必要な組成子を見逃せる定義であるやうにもはれる。

観察作用を特色づけるものは、諸事實に對し觀察者の精神がその事實そのまゝの純然たる敘述的記載だけに満足する（それが一事實に對してであつても事實全體、事實の一聯續に對してであつても、孤立した諸事實について集團せる諸事實についてであつても、觀察者の精神が關係を求めざるか又は認めざるが故であつても）作用であるといふことである。かやうに取扱はれる事實が、自然のまゝで利用されるとしても或ひは反對に何等かの方法で整頓され、準備され、生起せしめられさへした後取扱はれても、何等かの人工的の装置を伴ひ、伴はずまた何等かの器械を伴ひ、伴はずに利用されたとしても、それは作用の本質にとつて大して問題ではない。——實驗作用の特色たるものは實驗者の精神が諸事實の間、是等の諸事實の一部の間に關係を見出だす作用である（肯定的關係であつても、單に否定的關係であつても、因果の關係 relation de causalité であつても、條件 conditionnalité の關係、又は相互依存 interdependance の關係、またはその他のものであつても問ふ所でない）。實驗者の精神が關係を抽出する諸事實が、自然に、實驗者の干渉なく關聯してをつたとしても、反對に實驗者の何等かの用意、装置、器械、及び何等かの積極的行爲によつて關聯されてゐたとしてもこの作用の本質にとつて問題ではない。

觀察がもし一定の諸條件を満足さすれば、科學的觀察となる如く、經驗 expérience も科學の經驗 experience de science と認められるには一定數の正規諸條件を満足せしめねばならぬ。しかしそれは各々の作用とその相違の本質とに觸れない。

問題を一層明確にせんがため、この豫備的考査に必要なものは、實驗者の行爲による經驗は、自然科學に於て確かに最も普通に行はれてゐるものであるが、此經驗は、いかなる點に於て、科學的結果の特色たる型の關係に歸着する可能性をより多く有するか、そしてこの可能性は、此處に（譯者註—經驗學に於て）本質上絶對的にこばまれてをりはしないか、又は何等かの種々な點に於て、特殊な方式において許されてはゐないかを見るのがとりわけ必要なのである。

一、疑ひもなく學者の任意な選擇により、或時、或處、或結構内に研究の對象たる現象を生起する事が出来ることは、彼れにその望む所その重要と思ふ所にびつたり研究と證明とを齎す非常な便利を附與する。然し此能力は、決してこれを特色づけるものでなく、結果の價値を構成するものではない。尙又最も發達せる實證科學に於ても實驗は、全く任意だといふわけでない。反對に普通の場合は、多少、學者は、與へられた、彼が中心でない事實の條件を考慮しなければならぬのである。その實驗者の價値、その結果の展開は、主として現實に於て彼の任意に行爲し得ざる所のものを良く利用する多少大なる熟練さに依屬してをる。此處においては（譯者註—經濟學に於て）かゝる相互依存は、最高度に達してをる、そして之は特殊な警戒 indication とか豫防 précautions とかを呼び起し得る。然しこれは、絶對的反對ではなく、原則上決して經驗の不可能を構成してをらぬ。

二、疑ひもなく學者の任意による經驗 *experience* は、學者に正しくその實驗中彼の包含せしもの、それを包含せしめざるもの、を知悉せしめ、諸事實をかやうに擇びとつたもの以外の一切の因子から比較的獨立した、よし獨立に非ざるも多少依存關係のはつきりした研究結構内にとりいれることが出来るやうに見ゆる。併し乍ら此點についてなほ最も都合のよい場合に於てもこの能力は、事物其物の性質から強いられた條件と制限がないわけではない。かやうな結構中にいれるのに成功するのは程度の問題であり、屢、批判的論議の結果である。同様多少常にこの意圖に役立つやうな何等かの自然條件を利用する。何れにせよ結果を價値あらしめるものは學者の行爲が多少大なる役割を演ずるのではない。此處(譯者註—經濟學)においてより以上、しかも極めてより以上に事實の條件 *condition de fait* に依屬してをること——これは特殊な方法を俟つが——その結果は、この點で原則上不可能と思はしめぬ。

三、疑ひもなくその上、具體的現實 *la réalité concrète* の與ふる所は、精神がその抽出した事實間の關係、科學的に満足すべき證明價値ある關係を直接取り出し得るには一般にあまり複雑すぎる。多くの場合このために單純化、そのあり得べき影響を遠ざけんとする或種因子の除去、反對に吾人の本來研究せんとするものを最も純粹な、出來得るかぎり明確な状態に游離せしむること、一言で云へば普通實驗者の意識的な有効的な行爲によつてしか得られぬ系統的抽象が必要なのである。しからば人はいはん、いかにして吾人の領域に於て經濟學者は、その隨意に系統的嚴密な研究の必要に應じ、彼が實驗的にその作用を研究せんと望む因子を遠ざけ、離し、強め、取扱ひ、結合しなど

することが出来るか、然しながらこゝでも(例へば天文学の領域における如く)實驗者の能動的な干渉全くなく(この例においてはそれは當然)全く決定的な諸條件の中に經驗の可能が提示されてをる場合を引用することが不可能ではない。また多少すなはち例へば經驗の準備又は範圍決定の過程においてさへ、自然それ自らにより既に實現された何等かの抽象を利用しない、又は利用せんと求めない科學的研究は存しないことさへ云ひ得る。もし『抽象』の役が、實驗者により實現されたとしても(實際いふとそれが自然科学において大多數の場合であり、最も重要なものであるが)然しこの人間の行爲により得られるといふ事實が、經驗の價値を構成するものではない。

吾人の研究に對し何と云ふべきであらうか。乃ち隨意に具體的現實中に吾人の知識に必要と見ゆる分離、操縦を妨害せられ、吾人は、他の方法、既成の斯る經驗を探すといふ方法に轉向しなければならぬ。此處においての(譯者註—經濟學に於て)實驗的研究の技術は、大部分研究を既に實現してをる諸條件、すなはち例へば最も單純明瞭純粹な場合とか、研究の對象に丁度格好な抽象(否定的乃ち排除、肯定的乃ち游離、増力 *reinforcements*)とかを實現してをる諸條件中に研究を定置することである。そしてこの技術は、特殊の原則と方法とを認容することが出来る。然しそれは研究と證明の原則上の差ではない。

四、實驗室の經驗は、實際具體的現實によつて提示されたものの中に單純化游離蒸溜等をなすためのみならず、また屢、具體的復雜性中に包含されあらはれてをる(又はあらはれてをるやうに見ゆる)のと異なつた様式に諸事實を處理するし、また屢、本來の現實中に曾て見出だされぬやうな

種類の事實、事實の組合せを誘起しさへするに役立つ。疑ひもなくこれが最も發達した實證科學において一番効果多しとされた方法の一つである。學者にとり要素を自身を取扱ひ、處理する可能性は、この種の作用の條件であることは明かである。然しこれにより彼によつて創造されし人工的世界に到達しえないといふことは注意すべきことである。常にある時期に、決定的な部分において彼は自然に放任してしまふ。『彼がある事實を自然に實現せしめた』らその程度に於て實證科學の到達した成果、知識と眞理の解釋の結果が生れる。それゆゑ、結果の價値を構成するものは實驗者の行爲ではなく、最後に自然自らによつて提供された一致である。そしてこれもまた此人間の行爲の限界をかざるものである。

事實の種類に従ひ、その知識の状態に従ひ、その方法又はその技術から、また求められる關係 relations に従ひ、然し常にその努力の何れかの點に於て、本來具體的な現實によつて提示されたもの以外に、又その先に、多少離れて學者は、實際その事物に對する彼の行爲上の制限、彼の諸要素を處理する能力、彼の事實及び因子の組合せについての諸制限に遭遇する。一切の知識の部門において學者が、(現在まで)彼の取扱ひ得ぬ、または取扱ふを知らぬ諸力、彼の實現するを得ざりし組み合せ、従つて彼の持つ經驗によつて研究され得ぬ當該問題といふものがこれに相當する。こゝにいふ無能力の程度は、實際をいふと屢々、こゝにいふ科學發達の度合と反對である。然しこの事は少くとも明瞭に次の事を示す、すなはち吾人の研究範圍において、本來實現されてあり、されてあつたものに制限され何等か實現せる行爲の中に(その生起せしめることあたはず、生起せしめても少

くとも不充分なるが故に)ある種の觀念 *concepts* 又は認得された組合せ、ある推測された關係を研究せんとするやうにまたげられるといふことは、原則上の差違でなく、然し程度上、最極限なる程度上の差であるといふことが示される。

五、然し吾人の實驗的研究は、具體的な現實により提示されてをるやうなものに實際限られてをれば、自然科學の實驗に非常に劣るといふことを認めねばならぬ。經濟的生活にたいする調査の進歩に伴ひ、この現實の純粹な單純な登録が、いかに既に豊かなそして變化あるものであり、またさういふものとなりうるとしても、それが吾人に既成のものとして吾人に大切に見ゆる要素の組合せ因子の比較を提供するとは毫も豫測し得ぬし、それが、全ての「抽象」(隔離、游離、蒸溜)を全て既成のものとして提示するといふことは今でも豫測し得ぬ。是等の抽象は吾人の最少限度に期待するものであるけれども。

然し次のことを認識することは甚だ重要である、即ち吾人の領域に於ても學者は、自然に與へられたより以外の様式に事實を單純化させたり、又は組合したりして決して全くとるべき手段なしといふわけではない。決定的な經驗に必要な抽象を行つたり、研究の必要に應じ、新しい組合せをなす可能性を全く奪はれてをるわけではない。取扱ふべき要素に對する物質的行爲の形をどほしてのみ實驗者の積極的干渉を考へないのは先に批評した實驗作用の定義に屈從した結果である。因子を除去し、又は游離するため、また一方これを結合せしめるため物的方法とことなつた方法のあることをみとめねばならぬ。たとへば一現象に關する數的材料について或方式により、ある因子から當

該事實を分離し、孤立せしめ、硝子によつて電動體を消耗の原因から隔離するのと同様有効正確に同じ論理的方法で之を行ふことが出来る。確かに此處に此領域の實驗に特有でありうる(少くともこの程度に於て)他の特質が存する。そしてこの點において特有の原則と方法とが必要でありうるのである。實驗者により實現されし單純化抽象啓示的組合せは、此處においては物質的作用の方法よりも寧ろ智識的作用の方法で實現される。然し作用の性質は同様である。もしそれが必要な厳正さをもつて實現されたとすれば、經驗の價値は同様である。

六、しかし、求むるやうな經驗をなすため適用された智的作用と物質的作用との間に、前者にとり大なる危険な大相違の存在を掩ひ隠してはならぬ。現代の學者(Claude(註二))は「經驗は、未知數を忘れぬことの確實な唯一な方程式である」*L'expérience est la seule équation où l'on soit sûr de ne pas oublier d'inconnue* と謂つた。この安全は、物質的實驗によつてしか齎されぬ。もし學者が何等かの必要な要素を除去したならば、期待する關係は生起しない、そしてこれを認識せざるを得なくなる。智的作用により實現されし經驗においてはこの自動的制裁は、事實自身には缺けてをる。それゆえこの事實による制裁の科學的必要を忘れ、かくして得られた結果だけで満足してしまふ所に危険が存する。その結果といふのは、この點に於てまで、概念的構造に過ぎず、實證的結果ではない。それゆえ吾々に缺けた物質的な露骨な制裁に應じ、何等かの方法でかゝる結果と現實との一致調和を再認し、議論せんと求むる特殊の義務が吾人に課せられてをる。然し此點に於てすらその相違は吾人の場合と自然科學の場合と原則上の相違といふより程度上のものである。

七、しかし惹起する危険をよく認知しなければならぬ。それは必要又は充分なものとしてある關係に注意するが、他の關係もしそれに固執すれば、成立なし得るといふことである。單に又は當初ある因子を示し、とり除きおき、それより一層重要なものと決定的なものを見誤り、看過することである。

一體物的經驗は、事實上つねにかやうな誤、不充分を全然犯さぬわけではない。吾人がいつたやうに、これにおいては比較的獨立せる結構内にいれ、他の要素なく確實に求むる『抽象』、組合せを其中に行ふやうに努力してをる。然し吾人は常に吾人の望む因子を確實に除去し、又は挿入し、たゞそれだけにとどめることが出来るやうか? 屢々否應なしにその經驗中に彼の望むより以上の因子外の因子を保有してをることを實驗者が發見することが生起するではないか。最後に吾人が、その豫測しない何等かの因子を含め、除去し、挿入することがないと保證しやうか。しかしこのため正しく決定的な經驗をなすことを斷念し放棄すべしと云ふべきであらうか。決してそうではない。是等の要素がことなつて存在する條件中にその實驗を數多くなしたり、又は經驗中に於て、その意義、大いさ、限界について論じ、批評的に批判したりして、是等の諸要素のあり得べき作用を決定し、之を放任させてをくやうにのみつとめる。そしてこれが出来れば、經驗は、それが實質的にないもの同様効力を發揮することが出来る。

それ故吾人の領域に於て、つねにではなくとも屢々最良の條件に於て、求むる關係に最も良好な自然的抽象の場合において、此結果に性質上適用出来る様々な作用によつて全てののりのけ又は組

合せをなした後、かゝる除去又は組合せを行ふ所の智識的作用が、經驗の結構内に吾人が適當の處置をなさうと考へたもの以外多少數多い他の可能的勢力をもつ因子のなほ存在せぬといふことを充分保證しないことは決定的經驗の不可能を構成しない。此處においては(譯者註—經濟學において)彼處におけるごとく是等の他の可能性を放任するといふことのみを要求する、そして此處では彼處におけるごとく——是等の因子に對してことなつた諸條件において證明の反覆をしたり、又は、實驗自體の中においても是等の要因の可能的作用を論ずるといふ二方法が適用される、殊に恐らく何れの場合にしても第二が適用される。唯一つの相違は、此點において程度の差である。除去されぬ(既知又は未知の)是等の要素の數と複雑性が、此處に(譯者註—經濟學に於て)現象の複雑性のため、觀察、經驗の諸條件のため、かゝる現象の遙かに單純であり、もつと自由に研究なし得る他の領域より、普通非常に大きいといふことはありうる。そして此點についてまた、特別のこゝいふ條件のため、この範圍において經驗の批評を許し、基礎づけるため特に適應した原則を求むる理由があり得る。然しこれが、作用の困難を増し、また少くともこれを長びかしたとしてもその性質には關係する所なく、その性質は本質上同様である。

それ故いかなる立場からいつてももし吾人が經驗作用の適當な觀念から出發してをれば既成の實證科學が了解し、行ふ所と、吾々の範圍においてこの名の本に吾人が可能と認知する所と本質上又は性來上の差を發見しない。また自然科學においてさへ現象の生起の條件を物質的に改めることが實驗者に實際的に不可能である(たとへば氣象學天文學に於て)時には觀察を吾人の指示した様な方法の適當な應用によつて眞個の經驗に變換する場合がある。

然しもし吾人の領域における所謂科學的實驗が之によつて普通世人のなす偏見的反對論から解放されたとしてもこの可能を全く無効にしてしまふことの出来る事實の或事情を考察することが必要である。それはまた社會科學の領域に特有のものでなく、同じく自然科學の中にもある部分、ある立場において遭遇するものである。それは實驗者が任意に有形的に條件を改善できない事實に對してのみならず、またそのまゝに全ての具體的條件と共に一般にその任意に生起も再起もせぬ、また本來屢々多くの場合(少くとも一個人の研究する時間との關係においては)生起も再起もせぬ、あるひは(またこの同じ時間にたいする關係上)長期で又恐らく生起して二度も再起せぬ、または恐らく一度しかあらはれぬ非再起事實をも取扱はねばならぬといふ事情である。それゆえこゝいふ事實から學者は、自ら認知せず、彼のをつた時、その研究範圍にたまく生起したもののか、あるひはうまくいつて記録され、痕迹を残したもののみしか認知することが出来ぬ。

最初のものよりは彼が記録したもののしか認知せぬし、第二にたいしてはその記録されたものが遺物として残つたものしか認知せぬ。當該事實の認知それ自身の認識上の制限は、處理出来る資料の批判的検討により、その到達した事實の知識について供給するところを批判的に検討することにより吾人の研究を開始するを余儀なくする結果を生むばかりである。もし考査が否定的結果かまたあまりに不充分的結果であればそれより先に進む必要のないことは明かである。

然しこの考査が満足すべきもの、すなはち觀察され又は痕跡をのこした事實の認知について、吾人の處置し得た材料が全く確實に吾人の知らんことを望みうる一切と應じてをると想定せよ。その時まさにその新しい問題、數に於て制限され、時間も制限され、甚しきに至つては、(過去事實の全領域において) 決定的に制限された既知事實にたいし、決定的實驗の可能如何といふ問題が起る。諸君の注意を疲勞せしむることを慮り、予は、今この口頭の檢討には此問題を取扱はぬ。予は、その結果は、適當な豫防によれば此處でも吾人の企圖に好都合であると謂ふことを示すにとゞめやう。

此二つの先決問題たる檢討は、それゆえ要するに賃銀のやうな研究主題において實證的實驗は、先天的に理論上にも事實上にも不可能ではないといふことを認得することに歸着した。一方に於て經驗の觀念、その研究及び證明作用の本質をよく採用し、この領域における吾人の知識の條件と一層進歩した自然科学のそれとの間に原則上のいれがたき反對なく、それに程度上手続き上の大なる差に過ぎない。他方此處に吾人の知識に加へられた事實の制限が如何に大なりと雖も、それが強制的に全ての經驗のもし外に有効の條件が満足すべきものたる時はその結構内において有効なることを妨げないやうに思はれる。然し、同時にこの二重の考試はこの理論上の可能と事實上の可能の實現は、何等かの方向に於て現在の研究の諸條件に適當な探究と證明方法の適用を促すことを示す。そこで今度はこの適用を正確に定義し、この方法的序論の後半に之を陳述しやう。予は、まづ第一に傳統的方法論の提供する所を檢討してみやう。

一、méthodes de présence, d'absence, et des variations concomitantes, 存在、非存在、附隨變化の方法

二、Simplicité, netteté, pureté) 單一、明瞭、清純性

三、Pluralité des expériences. 經驗の多數性

然しこれはなほ不充分であるやうに見ゆる。そして予は——一致して行はれた事實の研究中に認められえし所に従ひ——經濟學の作用する結構内にもつとも可能的に實驗室の實驗が學者の任意に實驗室で實驗し得る利益ある科學において一氣で提示する所に對應する諸條件と諸保證とを成立せしめうる如き諸原則を認得し表明せんとすることに努力した。予は此處に諸君に、予の與へんと提議する指稱 *dénomination* を示すにとゞめやう。

四、Précepte du phénomène se produisant. 生起現象の原則

五、Précepte de l'intégralité indépendante. 獨立全體の原則

六、Précepte de la "Ségrégation" homogène. 同質分離の原則

七、Précepte de l'identité de base. 基礎同一の原則

八、Précepte de la revue sélectiva. 選擇考査の原則

九、Précepte de la supériorité des correspondances en succession pour la détermination des dépendances, et précepte de la liaison la plus étroite et de la sériation des dépendances. 依

屬確定のため繼起的對應優越の原則及び依屬の最緊羈絆及び系列の原則(譯者註—これらの名稱の適當なる譯名は、著者の詳細なる説明をまつ必要あり、此處には單に假譯を附す)

然し予はたゞちに次のことを附言したい。一個の方法の可否は、抽象的の公式化によつてよりもその應用その到達する結果によつて判斷せられることが多い。予のなほ云ひたいことは予の諸君に提示した(極めて不充分の方法であつてまことにすまないが)指示は概念的の思辨から抽出されたものでなく、有効的な研究、經驗から順を追ふて推論せられた實地經驗並にその結果から抽出されたものである。それによつて予は、これらの指示が最良だとうぬぼれはしない。また經濟學社會學の研究部門全體に充分であると假託しはしない。然し予は何れにしる外の研究分野よりもこの定型、この定道に従ひ、もつとも有効なる實證の基準は決定せらるべきであると思へる。

これが諸君の招待に應じるためなした予の考への一端で、その招きを改めて感謝する。予は、以上述べし所が何等かの考査の價値あり、吾々の共通なる關心である研究、吾々の共通なる目的、經濟學の進歩のために何等か利益になると諸君に考へられることを希望し、此處に以上の意見を開陳した次第である。

註1 Le Salaire, l'Evolution sociale et la Monnaie (Paris, Alcan).

註二 一九二三年四月二十一日ソルボンヌにおける講演

新刊紹介

長谷川安兵衛著『新銀行會計研究』

三邊金藏

著者長谷川氏は昭和三年に銀行法及同施行細則の改正實施を見るに至るや、早くもその研究を新にせられて『銀行會計學』なる好著を同年中に世に送られたる篤學の士である。而して今茲に紹介せんとする氏の近業は、此の新銀行法に基く最初の著書に對する Ergänzungsband を爲すものであつて、前後兩著の相俟つて銀行會計の研究に寄與する所少からざるは、疑なきことと思はれる。而も本書の内容を瞥見するに、凡て六章の内第一章より第四章までは、業務報告書に關する特殊の研究に充てられ、第五章は原價計算、第六章は豫算統制と、何れも從來の銀行會計關係の論著に於いて十分研究の遂げられざりし、若くは又全然考察の拂はれざりし分野を取扱へるものにて、その限りに於いても本書は銀行會計に興味を有する者に對して有益なる研究上の指針を提供する好個の參考書なりと云はねばなるまい。

今少しく其の内容を觀察して評者の私見を述べんに、先づ第一章「新銀行法の會計學的解剖」に於いては、新法規に依つて改正を加へられたる營業報告書、貸借對照表、損益計算書に就いて一々これを舊法規と比較對照を行ふと共に、之に對して會計學上の見地よりする批判が加へられてゐる